慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	シヨオを中心として観たるフエビヤン社会主義運動（三、完）
Sub Title	
Author	町田, 義一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.10 (1921. 10) ,p.1353(93)- 1367(107)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19211001-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彼は常に自身の勞働について考へ、さうして如何なる場所においても、全生產過程に關して發言權を持つてゐなければならない。かくて Mo-ris は勞働者と藝術家との間に何等の區別を設けないのである。彼は主張する。藝術家が勞働者であり、勞働者が藝術家であるやうな社會狀態が生れない限り、眞に健全な、生々とした、さうして永久的の藝術は存在することが出來ない。さうして文明社會における勞働者の雇傭は勞働者が彼の報酬として要求するところと一致しなければならない。「彼自身並にその家族が缺乏や墮落に墮ち入らないだけの貨幣、生活のための勞働以外に充分の閑暇あることを必要とする。（例へこの勞働が彼に對して愉快のものであつても）かくして彼は讀んだり、考へたりする時間を得、さうして、彼の生活を大世界の生活と一致さすのである。さうして前に述べたやうな種類の仕事と、之に對する賞讃と、彼をしてその同胞に友情を感ずるやうな奬勵が要する。最後に彼の藝術的享樂である。それは吾々の我儘が自然を排斥しなければ、自然が自由に與へる美を充分に味へるやうな住家を必要とする。」彼は斯くの如く理想的の生活を描いてゐるがその中には建築の重要が最後に說かれてゐる。彼は、前にも述べた通り、建築の價値を重視して、それは生活のための藝術の始めであつて終りであるとした。彼に從へば、精神が肉體に宿つてゐるやうに、人間は家に住むのである。從つて建築並に之に附隨してゐる裝飾藝術の荒廢は、直ちに人間生活の墮落の原因であり、結果なのである。

「快樂を以て行ふことの出來ない勞働は、之をなすに値しないものだ」と云ふ藝術的立場にあつて、勞働者の生產の管理を要求することが、現在の經濟制度と相容れないことは明かである。資本家專制の現時の經濟生活においては勞働は單に一の資本の附隨物に過ぎない。利潤はすべてであり、勞働の享樂化などは勞働者の奢侈に過ぎない。斯くの如き商業主義の排斥者たる Morris が現時の生產制度を憎惡したことは當然のことである。勞働者が藝術家であるやうな場合には「資本家は彼を始末におへぬ奴だと云ふだらう。さうして事實においても彼は始末におへぬ人間で、貨幣獲得の機械の車輪における障碍であらう。否彼は多分機械そのものをも止めるであらう。」（Wm. Morris, Hopes and Fears for Art. "Making the best of it." pp. 164-166）

斯くの如く自由と公正とを其の藝術的生活において要求し、さうして現時の社會制度がその理想に反してゐるものだとする思想を懷いてゐる William Morris が社會主義へ入るのは實に一歩にして足りるのである。（未完）

シヨオを中心として觀たるフエビヤン社會主義運動（三、完）

町田義一郎

七

一八九九年拾月拾一日南阿に對する宣戰の布告があると共に Fabian Society 內には此問題に關する意見に相違を生じた。

元來、協會も一般社會主義團體同樣戰爭を憎惡し、之に反對であつたが、此宣戰と共に多數會員はその態度を一變し、英國の必勝を願ふに至つたのである。然るに多數の自由主義者團體

並に社會主義者等は此戰爭に反對し、極端なる者に至つては自國の敗北を望む程であつた。I. L. P. は此戰爭を以て、金儲をしやうと資本家等は常に戰爭を嗾けるのだと社會主義者の說く所の好實例と倣し、盛んに遠征軍や政府の態度を誹謗した。協會內にあつても Marx 熱の旺盛時代に社會運動に參加し、主に I. L. P. と行動を共にして來た J. R. Macdnard, S. G. Hobson, G. N. Barnes 等並に當時自由黨と關係のあつた。Dr. Lawson, Will Crooks 等は Shaw, Webb 等生粹の Fabians に對抗した。

後者の意見は、抑々協會の目的とする所は社會主義の促進にあるので、斯る問題は『社會主義の決する事の出來ぬ又觸れない』問題である事並に會員各自の思想並に行動の自由は認めるが、協會全體として何れに決しても多數會員を除外する樣な結果を招く政策を協會が正式に採る必要はないといふのであつた。

拾月拾二日最初の兩者の論爭では Boer 人に同情を表した決議案討議の緊急動議は否決され、拾二月八日 Clifford's Inn Hall の會では S. G. Hobson は協會の態度を鮮明にする必要を說き『斯くてこそ Fabian Society は資本主義的帝國主義並に高慢な國家主義から分離し、而して我協會の設立に依つて促進させんとする良き社會組織の擴張と相容る範圍に於てのみ帝國の擴張を援助するものなる事を誓明す。』といふ結論の決議案を提出した。實行委員側の Shaw は國會の既に可決した事を彼斯、論爭した所で無益なるを述べ、戰爭の終結と共に Transvaal 鑛山が一般公衆の利益になる樣な策が採られる事、並に鑛夫の利益の保護を要求しただけの修正案を提出したが廿七對五拾八票で否決され、先きの決議案が五拾對五拾九票で可決された。

茲に於て、實行委員側は會則に依つて附與された權限を利用し Hobson の決議案を全會員の郵便投票によつて決せんとした。斯くて翌一九〇〇年二月『貴下は戰爭に關聯し、帝國主義に就いて Fabian Society が今や公表せんとしつゝある所に贊成なりや否や』Fabian News を以て全會員に問を發した。同紙上に兩派は各その理由とする所を揭げて贊意を求めた。公表主張者は、協會は國際主義が思想に基き侵略的資本主義並に軍國主義を排すべしと主張すると共に戰費は社會改良を遲延せしめ、妨げるに至るものなるを說き、之が反對者側は斯る軍事問題は協會の範圍外に涉る事柄であつて、協會の決議を以て、如何とも爲し能はず、而も協會內部の和衷協同を破るに至るやも測り難いと主張した。非常な興味を以て迎へられた此投票の結果は、當時の會員八百名（內海外在住者五拾名）中投票總數四百七十六票に達し二百十七對二百五十七票といふ僅少の差を以て公表贊成側は破れた。

爾來、協會は南阿戰爭を是認し、又帝國主義的侵略並に反民主主義的な軍國主義を援護したものと絕へず非難された。併し、今 Pease の之に對して辯明する所を聞くに『初期に於て吾々は社會主義と政治運動の間に明白な區別を設けてゐた。即ち吾々は Home Rule や Church Disestablishment の如き問題は "red herring" の性質の事柄、即ち吾々の主張した經濟的解決に比すれば實際重要でない問題として片寄せて置いたのである。……吾々は勞働階級に對して、政治問題に關係するより彼等自身の社會狀態に大いに注意を拂ふ樣に警告したのである。自由黨並に保守黨の領袖は富の分配の不公平といふ事實から勞働者を引離さうと絕へず努めて

ゐるものと吾々は考へ、少なくともそう唱へてゐた。吾々は社會主義は經濟學説であつて他の問題ではないと主張した。……南阿戰爭の場合に於て吾々を導いたのは自己保存といふ事であつた　如何なる決議も協會を破壞するに至るのは明らかであつた。當時、感情が非常に激してゐた。南阿 Boer 人最負の人々は襲はれ、怒咆され、彼等の行動は誤解され、又彼等の動議は誹られた。彼等は之に報ゆるに英國軍の恐しき慘忍を非難し、又我軍に生じた有ゆる不幸を喜んだ。協會には戰爭是認の公表をしやうといふ樣な議題は提出されなかつた。極く二三の會員はそんな所まで考へてゐたが、創立以來協會の爲め盡力して來た殆んど凡ての會員は、或自由黨員が餘り愛國心に反すると彼等の看做す事に同意するのを拒絶し、而して若し I. L. P. も同樣の政策を採るに於ては脫會或は現職を辭するに至つたであらう。……』と。

此結果實行委員中 J. R. Macdnald と J. Friederick 並に會員拾三名を失つたのは已むを得ぬ次第であつた。

四月の實行委員改選後の委員會は帝國主義に Tract の發行に決し、五月の大會では『社會主義者の立場から觀た各政黨の活動並に綱領の解説批判』の起草は決議され、此難事業を引受けたのは Shaw であつた。拾月に至り其校正刷は各會員に配布され、同月廿五日には會員は修正討議の爲めに召集された。（出版の爲め斯くの如きは例のない事であつた。）校正刷に修正、或は批評を加へて返送して來た者は百三拾四名、全然反對者一名、何等の宣言を必要とせざる者九名、他は全部承認を與へた。斯くて Clifford's Inn の相談會には修正、追加、削除の權を附與された會員百三四十名出席し、三時間の討議の末、拾八名は帝國主義に關する部分の削除を主張し、又出版反對者は拾四名に過ぎずして可決されたのが "Fabianism and the Empire" の出版である。

激烈な南阿戰爭の論爭に關し大多數會員の滿足を求めんと Shaw の非常な苦心に成つたものと云はれてゐる。又同時に總選擧運動に利用の爲めもあつて、內容は外交政策、貿易政策より勞働問題、徵兵制度や敎育制度の改善、住宅問題、官營事業等非常に廣く涉つてゐた。

八

廿世紀以後の Fabian Society に就ては、一九〇二年改正の英國敎育制度の範となれる Webb を主とせる敎育制度の討究（彼と反對の地位に立てる Headlam 並に Wallas は終に實行委員を辭すに至る）、S. D. F., I. L. P. 等との交涉 Labour Representation Committee の組織、Labour Party の成立、協會の加名、並に協會々員の立候補等、その他各種社會問題並に產業の調査機關設置（直接協會に關係なく一九一三年三月以來 Shaw, Harben, Webb 夫妻等が Clifford Sharp を編輯者として發行せる週刊 New Statesman は之が研究の發表機關となる）、政治及び純學藝方面研究の種々なる Groups の組織（その中 Orage 等の Art Group からは Guild Socialism 思想の淵源と稱せられる New Age を發行し、又その Women's Group は先きに無政府主義運動に赴ける Wilson 夫人の復歸と共に組織され婦人參政權運動に從ひ Women's Group Series を發行した）、一九〇七年來の夏季學校經營、地方並に大學 Fabian の消長等語る可き多くの事が殘つてゐる。併し、玆には H. G. Wells 及び G. D. H. Cole その他の協會改革運動に就いて述べ此小篇を終る事にする。

建設以來既に拾餘年、社會主義團體の幾多變遷の間に存して昔ながらの Fabian Society は益々その活動が實務的常識的傾向を帶びるに至つた。斯くて終には協會内の新人中からは協會改革の聲が叫ばれ、理想主義者たる新らしい Guild Socialist からは嘲笑と非難の聲を浴せられるに至つた。The New World for Old の著者 H. G. Wells が入會したのは一九〇三年二月であつて、その五月彼の最初の講演 The Questions of Scientific Administrative Areas in Relation to Municipal Undertaking は訥辨に禍されて失敗であつた。彼も此弱點を知つて居るので後の論爭は主に文書に依つたのであるが、若し彼が Old Fabians の雄辯と競ふ事が出來たら、協會は彼の天下になつたかもしれぬと稱されてゐる。

一九〇六年一月の講演 This Misery of Boots に次ぎ、二月九日の演說 Faults of the Fabian（後各會員に印刷して配布）に依つて彼は改造運動の急先鋒となつた。彼は協會に理想に對する熱烈な憧憬のないのを指摘して『空想的な Mégalomania が缺けてゐる』と云ひ、又協會全體を目して『半社交的會』に過ぎずと做した。『而して Fabian の第一の缺點はそれが小さいといふ事であり、又第二はその小なるに比較しても猶餘り貧し過ぎる事である』。而も Fabians の企圖する所は『社會の經濟的基礎の變更に外ならぬのである。自ら此小集會、此小部屋を測り、餘り有效でもない Facts の尠しばかりの陳列を見、次ぎに彼方此方に散歩する會員の事を考へてみよ。……それから街上に立つて大家高樓を眺め、頻繁な交通、人々の雜沓を見よ。その根本を諸君は改良しやうと企てつゝあるのだ。偖て、如何して此雨滴の樣な活動に之が望み得やうか。』更に彼は協會の自家廣告の不足、新入會の困難、及び『拙劣な而も舊式な、調子が惡く斷片的で愚かな』「Fabian Society の根據」を支持する事に反對した。

彼は叫んだ。『社會主義者を作れ。然らば諸君は社會主義を實施するだらう。外に方法はない。』此方法を實行する爲め協會の大擴張を計畫して、彼は年收一千磅を得、會員を增加し、反對者說伏の爲め著書を發行し、宣傳並に一般會務處理の爲め有給無給の青年男女を多數募集せん事を提議した。そして彼は豪語した。『私が全くの夢想家でない限り、私が今諸君に述べた樣な宣傳を行へば一年經過するかせぬ中に我會員を一萬人に增すに違ひない』

斯くて Wells の意見に基き實行委員中の Headlam, Shaw 夫人 G.R.S. Taylor, と外 Wells 夫妻 Sydney Olivier 等拾名の特別委員會が組織された。Wells の渡米などに妨げられ翌年拾月に至り初めて作成された報告書は、Fabian News の週刊、「根據」の新起稿、British Socialist Party と改稱、實行委員會を廢し廿五名の評議員會を組織し、その指名に依る「出版」、「宣傳」及び「一般事務」各三名よりなる Directing Committee が會務全般を處理し、他の社會主義團體並に勞働團體と協力し代議士候補を立て、又之が基金を募集する等凡て實行上の些事に渡るものに過ぎなかつた。

實行委員會は此報告を Shaw 起草の實行委員會側の報告と共に全會員に配布した。Shaw の回答は先づ内部から起つた協會の批評を歡迎し、斯かる擴張計畫には多くの收入の必要なるを指摘し、實行委員會の擴張に贊成するも之を廿一名とし、三委員分會の委員を各七名にせん事を提議し、入會制限廢止、並に新「根據」起稿の贊成、Fabian News 週刊の反對等 Wells の主

張するが如き團體の組織を困難ならしめ、最後に、中流階級の社會黨組織の時機の來れる事を斷言した。

此二報告が一九〇六年十二月の Fabian News で配布されると共に實行委員を代表する Shaw 對 Wells の論爭は翌年三月へかけて數回 Essex Hall で行はれた。その間、特別委員會の提出せる新「根據」を見るに、社會主義は、（一）土地並に資本の國家への移轉を促し、（二）男女の平等公民權を強要し（三）年少者の教育並に扶助に關する私人の權限に代へるに公權を以てし「社會組織の改造」を行はんと努めるものであると。

（三）は意味の明瞭を缺けるを以て Shaw の非難を受け、（二）は之に反對する者になかつたが「根據」中に規定する事には多くの人々は躊躇した。如何となれば「根據」は之を認めぬ者は社會主義者と稱するを得ぬ程度の最小限のものなるに、協會內には Belfort Bax その他婦人參政權反對論者があり、又之を社會主義より寧ろ民主主義に關する問題なりとする論者もあつたからである。併し多數婦人會員は此條項の規定されん事を決議し、然らざれば特別委員會の報告に贊成投票を行ふを劫かした。由て此條項は一月十一日の會で可決された。

一月十八日委員會の組織に關する討論に於ては Shaw の提案、委員廿一名、三委員分會の編成、並に會員制限の廢止が可決され、二月一日の政治運動に就ての討論は、自ら社會黨を組織するか或は I.L.P. に追隨するかの問題に移つたが殆んど贊成を求め得ず、又勞働黨との協働、I.L.P. との友誼繼續は問題とならずして、二月二日終に政治上の政策起草の委員會を指定せんとの實行委員側の案が通過した。

之より先き一月に選擧された新實行委員によつて招集された二月廿二日の大會に於ては「根據」改正委員任命の提案が可決され Shaw, Webb Wells, S. Ball が指定されたるも Wells はその報告の作成前に協會を退くに至り何等の報告も提出されずに終つた。

此問題の決定後、新規定に依る實行委員の選擧には Webb, Pease, Shaw, Wells 等の順位で當選したるも Wells は既に協會の改革に倦怠を生じたるが、『宣傳』並に『一般事務』の二委員にも任命されながら間もなく之を辭し、一九〇八年四月には夫妻共實行委員に當選したが、彼はその九月、夫人は一九一〇年三月之を辭任し協會を退いた。彼の理由は『協會の信念の發表たる「根據」と意見を異にし、又その活動狀態に不滿なる』と加ふに『小說の創作に專ら從事する』爲めとであつた。何故、彼の說が行はれなかつたか。Pease に依れば、彼の說く所の空漠たるに由り、その結果の氣遣はれたると、協會そのものを熟知せぬ彼を指導者として十分信任するを得なかつた爲めである。

九

古い Fabian の領袖 Bland 並に Shaw の引退せる後、一九一一年の秋には Henry H. Slesser を議長、Marion Phillips を副議長、Clifford Allen を幹事とし、外拾五名の Fabian Reform Committee が組織された。その綱領は Wells のそれに等しく主に實際上の改良並に政治上の方針として『若し Fabians が政治に關係するなら彼等は勞働黨の援護者たるべきである』（一九一一年十一月廿八日同改革委員會發行「Fabian 政策の宣言」）と主張した。翌一九一二年に Phillips と Allen は實行委員に當選し、或實際上の改良は實施されたるも、七月の會に於て實行委員は、

協會としては今後も勞働黨を必らず援助するも會員に對しては各自が如何なる方法に依つて社會主義の爲めに盡さうとも之に干渉する事に反對する事を提議し、之に對する改革論者等の修正案は百廿二對廿七で破れた。そして十一月の Fabian News は改革委員會の使命の達せれし解散したといふ事を報じてゐる。

新しい無產者階級の福音の使徒として一九一三年に濠洲から歸來した Tom Mann の Syndicalism 宣傳に續いて Guild Socialism の思想は Orage その他に依つて The New Age 等に主張されるに至つた。殊に G. D. H. Cole の主宰する Oxford 大學 Fabian Society に於て多くの贊成者を得た。

Cole は一九一二年實行委員に選はれると共に協會の改革運動に從事し Guild Socialism の使徒をして盛んに勞働黨を非難した。之より一年前勞働黨の妥協に飽足らざる念の廣くなつた時、既に彼は協會は之と絶緣すべき事を提議し九十三對四十八票で破れたのである。一九一四年の夏、彼は實行委員たる Allen その他勞働黨反對者の了解を得、Fabian News 紙上に協會の目的の研究並に『根據』の字句修正を說き『Fabian Society は社會主義者の團體にして資本主義制度から社會を解放する爲めの國民的並に國際的運動の一部を成すもの』であつて此運動に反對な如何んな團體に會員が屬し或は相提携する事を禁ずる規定を設く可き事を主張したが、實行委員會は之を否定し、一九一五年五月の大會に於て Cole の說は否決され、彼及び數人は協會を退會し、その後間もなく Oxford 大學 Fabian Society は協會本部との關係を斷ち純然たる Guild Socialism 主張の團體となつた。

既に實行委員を辭して Cole の此改革運動に表面上關係のなかつた Shaw は當時の Guild Socialism を次の如く評した。『Guild Socialism は中世紀時代の名稱を用ひてゐるが、社會主義の下に於ては、各產業がその作業者に依つて管理さるべきであるといふ要求以外には何等特徵を持たぬのである。單に此事だけでは少しも社會主義を意味しないだらう。それは唯中世紀の Guild の復活、或は今日は排斥される幼稚な協働者の自治的工場の新らしい計畫であらう。社會主義を力說する Guild Socialism は諸產業が如何に完全にその各部員に依つて管理されやうとも、その生產物を共同に分配(pool)しなければならぬといふ意味を含むでゐる。凡ての Guild Socialists は之を認める故に、國家社會主義は共同に分配される生產物を受取り又分配する機關を包括しなければならぬ。斯くて生產者としてゞはなく消費者としての市民を代表する、斯くの如き機關は集產主義の全機械を更に使用する樣になる。茲に於て Guild Socialism と集產主義との間の相違（此相違を口實として一方が他方の代替物として唱へられた）は、それに對し Fabian の加へた鋭い批評によつて直に消滅した』（Pease—History of Fabian Society. Appendix IB pp. 265-265）

『過去廿ケ年間の Fabian Society の歷史は Shaw の歷史である』（Henderson—B Shaw p. 180）とまで稱せられる彼が何故一九一一年に實行委員の地位を去るに至つたかを詳かにするを得ないが、或は彼の過激派化の噂を聞く今日を以て見れば、彼自身協會の漸進主義妥協主義に滿足し得なくなつた結果ではあるまいか。

併し、Fabian Socialist としての彼には飽迄も『社會主義は一根據があるばかりであつて、その根據とは常識である。之が彼の說敎に表はれた

福音である。――嚴然と一歩も讓らぬ常識――である。……而して彼は種々なる制度に就ての彼の稍々冷酷な觀察を常識の福音として世に廣めた。それが社會主義に對する彼の貢献である。何んとなれば Shaw は明らかに常識と社會主義は全く同じものであり、everything else is nonesense なる事を示した。……有るがまゝに事物を觀察し、凡ての romantic illusion を排するといふのが Shaw の世に對する最初の而も最後の勸告である。……彼の福音を概括すれば「理想主義は政治並に道德の romance に對する單に美名に過ぎぬのであつて、倫理或は宗教の romance 同樣私には憎惡すべきものである」と云ふにある。』(Taylor—Leaders of Socialism pp. 91-95) 之れが彼のみに限らず一般 Fabians の態度であつた。『社會主義は常識であるから成功するのだ。』(Pease—op. cit., p. 256) 此常識主義、漸進主義こそ Marxism を歡迎せぬ、凡てに常識的な英國民の輿論の中に勢力を占めるに至つた。

斯る實際家の Fabian 勿論理論の方面は得意でなく、理論上の根據は『價値論に關しては Jevons の經濟學、Rent に關しては Ricardo の經濟學である』と Shaw は述べてゐる。(Pease—op. cit, p. 261) 如何にもその一は之を「論文集」中の價値論その他或は Marxism 批評に親ふを得べく、他は之を借りて單に Henry Geroge の土地國有の程度に止らず更に擴張し Economic Rent の法則として產業公有の論據を求めた 更に彼等の英國社會運動に對する實際上の最初の貢献は『英國に於ける Maxism の Spell を破る事にあつた。……Fabian Society は英國社會主義を此知識的束縛から解放した ……目的とする社會改造が、社會により產業が公有管理されるといふ大きな原則は認めるが、Fabian は Marx の用ひた經濟學、並に歷史解釋或は彼が豫言した政治上の進化を信條と看做す事を拒む』と共に、彼等の他の功績は、種々なる出版物、Lancashire Campaign その他の活動に依つて『英國勞働階級少なくともその指導者に社會主義は革命的又は政治的激變なく、現在の社會並に政治狀態に適用され得る、現に行はつゝある原則である事を敎へた』點にある。又彼等の自負に獨逸に起つた修正派の如きも Fabian の影響に依つて生じたものと倣す。Edward Bernstein は『Bismarck に追はれ倫敦に亡命の長い年月 Fabian Society 及びその領袖等と親しく交際してゐた。英國から歸ると匆々一八九九年に Marxism 批評の一書を著はし』Revisionism を唱へ始めたのであると。(Pease—op. cit., pp. 236-239)

又 Marx の思想を以て「進化」と「革命」の思想を混淆したるものと見る彼等は、その革命思想を無用物と排し、進化の方面を以て社會主義に缺くべからざるものとして、(Ibid. 240) 今日『社會主義を以て既に社會組織中に一部包含せられ』次第に擴大しつゝあるものと見るのである。社會主義は革命的崩壞によつて歷史上の或瞬間に一擧に實現されるものではなく、長年月の間に政治上經濟上の部分的の改良によつて漸次社會主義的色彩を濃厚にし、之等改良の綜合の結果現實されるものと見る Fabien の任務は間斷なく經濟上政治上その他一切の社會改良に努め以て『此社會主義の廣汎な原理を英國の產業及び政治狀態に適用させるにある。』と倣す (Ibid. p. 240) されば Fabian の幾多の功績は個々の當面の實際問題に於て認め得るばかりで、『吾々は社會主義の本道の進歩を殆んどしなか

つた事を告白しなければならぬ。資本及び土地の私有は卅年前と殆んど同樣繁昌してゐる』(Ibid. p. 243)事は彼等も肯定するのである。斯かる Fabian の樣な仕事を以て『Fabian の何人も Owen や Marx の樣な新らしい思想の偉大な宣傳者と肩を並べ樣とは要求しない。併し Fabian の樣に（漸次社會主義に向ひつゝある）時代精神の推移を理解する事も必要である』(Ibid. 240)

偖て以上の如く歷史的に述べて來た彼等の漸進的、實際的な主義政策の中には一面その弱點となり、又新興の理想家 Guild Socialists の餘りに誇張偏頗と思へるまでの非難と侮蔑を蒙る所がある。今此點に關して小泉教授の論文から二つの引用を請ふて此稿を終る。

『Fabian 社會主義は極樂境は一日にして成らず、改造には忍耐と長年月を要する事を說いた。忍耐を說く事と現狀に滿足する事とは同じでない。併し事實上忍耐を說く者は屢々現狀に對する「神聖なる不平」を忘れ易い。而してこれを忘れた瞬間に緊張は失はれて是に伴ふ人心浮化の作用も亦停止する。Fabian 社會主義(Revisionism, Possibilism 亦然り)の危險は此點に存した。』(改造所載『フエビヤン社會主義の功過』。卅七頁)『Fabian 一派と Guild Socialist との根本的相違は彼は人間を信じない實際家であるのに對して之は人を信ずる理想家といふ點に歸着する。實際家の目から見れば理想家の言說は迂濶で且つ俗に云ふお目出度いものであるだらうが理想家の目から見れば實際家の見解は低調で俗惡であるに違いない。Cole を初め Hobson, Penty, Russell 等の書を讀む者は通篇到處に理想家の俗物に對する反感と輕侮の念が露骨に現はれてゐるのを看過しないであらう。彼等は Fabian 一派の社會主義者が日常生活の必要のみに重を置いて人間の憧憬、熱情、理想等を解する事が出來ないのを陋として唾棄するのである。而して英吉利從來の社會主義者が他に如何なる功績あるにもせよ兎に角此批評を辭する事を得ないのは恐らく識者の一般に認めてゐる所だと思ふ。』(再論 Guild Socialism (二)九十八頁)

（完）

（附記　直接 Shaw の思想に多く觸れる余裕がなく表題に相應しからぬものとなりましたが Shaw 自身の社會思想に就ては別に述べてみたいと思ひます。）

十九世紀初期に於ける英國都市生活の一面（三、完）

奧井復太郎

十

前號に於てはエンゲルスの著書に基いて製造工業を中心として形成された都市に生活する勞働者の住居を主に紹介して置いた。エンゲルスは續いて勞働者の衣服や食物が想像を越えて粗惡なのを簡單に說明してゐる。小賣商人の狡智が工場勞働に依つて搾取せられた勞働者の所得を更に掠奪しやうとして居る。商業組織の缺陷は、人口の稠密な都市に於て充分に研究せらるる。消費組合の運動なども此の方面に於て起つて來る樣に、都市に於ける衣食の問題も決して等閑に附す可きものではないが此處にはエンゲルスに倣つて是れ以上言及する事をやめる。商業組織の缺陷の考察に就ては他によりよき機會が見出されるであらう。

エンゲルスは、『千八百四十四年に於ける英國勞働階級の狀態』の一章 The Great Towns に續づく二章 Competition. Irish Immigration の後に